オリエンテーリング
マガジン 10 周年

10 年を振り返る

村越 真 /藤島由宇
横田 実

10 年を振り返る

村越 真

手を出してしまったメディア

まだインターネットも完全には私たちの日常生活になっていなかった 2000 年ごろ、オリエンテーリングの人口停滞や競技情報の不足に対する漠然とした危機感があった。在野で模索する中で、僕は 0-forum というミニコミ誌を出していた。また同じように情報不足に対する危機感を持ってイベントカレンダーの発行を続けていた小野さん、1990 年代からジャーナリスティックな視点を持っていた木村君などが、オリエンテーリング界の状況に対する思いを交換する中で生まれたのが、このオリエンテーリングマガジンだ。

諸般の事情から廃刊に至ってしまった 0-japan の編集長であった故田口さんより「村越君はメディアに手を出しちゃだめだ」と言われていたので、「とうとう手を出してしまったか…」という気持ちと「それでも今手を出さなければ…」と気持ちが交錯していた。

突っ走った 10 年

オリエンテーリングマガジンに関わったこの 10 年は、自分にとってオリエンテーリング界でつっ走った 10 年でもあった。発刊直前には、日本で初の IOF の国際大会となるワールドカップが行われた。翌年には秋田でのワールドゲームズ、そして 2005 年の世界選手権、2008 年度のスキーオリエンテーリング世界選手権。その全てで競技部門または運営部門の責任者を務めた。

その一方で、IOF の理事を務め、2005 年からは、JOA の専務理事を務めることになった。それは時には辛い仕事でもあったが、マガジンの一編集者としては、世界の動きや組織の深部を読者に届けることができたのではないかとも思っている。それが読者にとってどの程度価値あるものだったかは想像することしかできないが、将来のオリエンテーリング界の発展につながる何らかの種になればと祈るばかりである。

顧客は誰か？

最近おもしろい本を読んだ。萌え系女子高校生のイラストが表紙で、レジに持っていくのをためらうような本だった。タイトルは「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」（石崎夏海著、ダイヤモンド社刊）。

ドラッカーの「マネジメント」は読んだことはないが、名前くらいは知っている。経営者の必読書といってもよい本だ。甲子園を目指す野球部を描く青春小説（または漫画）もマネジメントをドラマ仕立てにした本も珍しくない。しかし一見相容れないその二つの取り合わせが、意外な化学反応を見せる。ある事情で野球部のマネージャーとなったみなみは、マネージャーが何をすべきかを知るため、「マネジメント」を手に取る。「組織を定義せよ」と本に問われ、「野球部って何？」「何のために存在するの？」と自問し、「顧客は誰か？」と問われ、「野球部の顧客って誰だろう？」と考える。その中で、斬新なアイデアを生かしながら甲子園出場を果たすという青春小説である。

マガジンにとって、あるいはオリエンテーリング界にとって顧客とは誰だろう。また顧客に対して何を提供すべきなのだろう？10 年に一度くらい、そんなことを考えてみるのもいい。

（村越 真）

創刊 10 周年のコメント

藤島由宇

創刊 10 周年おめでとうございます。過去に発行されていた「0-Japan」の全巻を新潟県内のオリエンティアの方から譲っていただいた時に「紙に印刷されたものを残しておく事は重要だ！」と感じ、以後トレイルOのイベントを中心に投稿して参りました。

引き続き私の体験したオリエンテーリングの記録を、皆さんの体験記録とともにこのOマガジンに積み重ねて行きたいと思っております。

（藤島由宇）

マガジンとそれにまつわる話

横田 実

「オリエンテーリングマガジンを作ろう」という呼びかけがあったのが、2000 年の 1 月。あれから、もう 10 年も経っているのですね。

0-Japan が廃刊になり、紙媒体としての情報伝達の必要性を感じて、村越氏などからの呼びかけがあり、マガジン発行が始まりました。僕も、「大会の結果を残せれば」と思い、大会に参加した様子を 1 ページにまとめて、載せ続けてきました。

毎年恒例の大会は、記事としては似たような内容になってしまってきたところはありますが、これからもぼちぼち続けていきたいと思います。

できれば、色々な大会の主催者や参加者が、気軽に投稿できるようになればと思い主催者には「記事を載せてみませんか」と連絡しているのですが、大会運営に手一杯で、そこまで手が回らないようですね。

今後は、オリエンティアの多くが「私が作っている」という自負を持って投稿できるマガジンになっていってほしいと思っています。

編集や発行事務を手がけている方々の分担も、考えていかなければなりませんが、これからもお願いします。

（横田 実）